

若者の大志に溢れるエルサルバドル

朴 耕一

成田空港を飛び立ち、ロサンゼルスで乗り換えた後、アビアンカ航空のフライトでエルサルバドル国際空港に到着しました。ゲートを出ると、海辺の潮風とともに湿気が肌にまとわりつき、何度もネットで調べた「あの国」に着いたことを実感しました。

夜遅い時間にもかかわらず、空港の前にはピックアップ車が列をなし、家族らしき人を待っている光景が広がっていました。その場に漂う期待感と活気に満ちたエネルギーに、私は胸を高鳴らせました。



障がい者スポーツ振興を熱心にサポートしてくれた。
INDES 長官：ジャミル・ブケレさん



JICA によるマットの寄贈によって
指導教材の幅を広げました。



同僚と他業種の JICA 隊員との協力して行った
スポーツ防災イベント



巡回指導先の生徒たちが披露
してくれた伝統舞踊

翌日、首都サンサルバドルのホテルで目を覚ました。外に出ると、南国らしいカラフルな鳥がホテルの庭の電線で羽を休めており、パン売りが鈴を鳴らしながら自転車を漕いでいます。これまで訪れたどの国とも似つかない独特の文化を持つ場所に来たことを実感し、さらに興奮しました。



・現地での活動

私が配属されたのは、旧市街に近いスポーツ庁のオフィスでした。仕事の多くは首都での運動指導やリハビリテーション施設での指導でした。ある時は、教育省とともに研修会を主催するなど、多くの意義深い活動に参加しました。

時折ある地方へ出張もひそかな楽しみでした。地方出張では、朝早く出発し、高速道路沿いの小さな食堂で朝食をとります。朝の冷たい空気の中で味わう熱いコーヒーは、格別のひとときです。ある日の講習会後にこっそり同僚が拾った鶏とお隣になって移動したこともありました。そんな予測不可能なエルサルライフに驚かされながらも充実した時を過ごすことができました。



特に印象に残っているのは、ラファエルさんというカウンターパートとの出会いでした。彼には、日頃から「KOICHI のためになら時間を惜しまず手伝ってやろう！と思われるような人間になりなさい。」と上司として厳しく指導していただきました。事実、彼自身が限られたリソースで仲間を率い、卓越したリーダーシップを発揮していました。若いチームメンバーたちはその背中を追いながら、全力で仕事に取り組んでいました。日本では考えられないスピードで物事が進んでいく様子に驚き、彼らの一体感や献身的な姿勢に感銘を受けました。



年末に職場の同僚と海に行きました。
仕事だけでなく、プライベートでも深い付き合いをしました。

JICA とエルサルバドルのスポーツ庁（INDES）が長年にわたり障がい者スポーツの振興に真摯に取り組んできた結果が、実を結び始めていることを強く実感しました。優秀な人材が育ち、確実に良い方向へと変わりつつある国の姿を、目の当たりにしました。その具体的な例が、2023 年にエルサルバドルで開催された中米カリブ競技大会です。この大会では、政府やスポーツ庁の職員が力を合わせ、国の未来を築くために懸命に取り組む姿を見ることができました。彼らがスポーツを通じて国を発展させようとする情熱と努力は、私にとって非常に心に残るものです。私はエルサルバドルが着実に進歩し、より良い未来に向かって進んでいることを実感しました。そして、彼らと共にその変革の一端を担えたことに、深い感謝と誇りを抱きました。大会後にラファエルさんがこっそり私にくれた大会の金メダルは一生の宝物です。



サン・ミゲルでのインクルーシブ体育研修



特別支援学校の陸上競技の試合



熱心な特別支援学校の先生



現場の学校の先生たちとは、この国の教育について何度も話し合いました。彼らは日本への尊敬を口にしながらも、自国の未来に対する大きな希望に満ちていました。

彼らの言葉から感じ取れるエネルギーは、エルサルバドルが数十年後に治安、経済、教育の面で周辺諸国のリーダーとしての役割を果たすであろうと確信させるものでした。



ボランティアを募って実施した
スポーツイベント



プログラムのスポンサー企業への報告会



休日はソフトボールや野球チームに入りました。
打点・本塁打・打率・安打数で4冠王になりました。
チームメイトとは今でも連絡を取り合っています。

エルサルバドルでは人々との距離がとても近く、空間を共有するだけで、短い時間でもすぐに会話が生まれます。この見知らぬ者同士の自然なやりとりは、当初、自分にとって異質に感じられましたが、エルサルバドルを離れた今では、その何気ない日常の会話が恋しく思います。

私がもし、エルサルバドルに来る機会がなければ、この国を単に「治安の悪い中米の小国」として片付けていたかもしれません。しかし、実際にこの国の人々の温かさ、勤勉さ、そして豊かな文化に触れたことで、あらゆるものは実体験を通してこそ本当の姿が見えるということを改めて実感しました。



学校での送別会。生徒たちが素敵な装飾で迎えてくれました



活動最終日に「日本にいかないでー！」と生徒に言われた時は何とも形容し難い気持ちになりました。
引き続き残るエルサルバドルの後輩隊員の活躍を期待したいと思います。

最後になりますが、エルサルバドル社会の発展の黎明期の中で彼らと共に過ごせたことは、私にとって貴重でかけがえのない経験でした。この国の未来に向けたエネルギーに触れることで、ニュースで目にする彼らの進歩を自分のことのように誇りに感じるようになりました。これからもエルサルバドルが前進し続ける姿を見守り、応援していきたいと心から思っています。



敬愛するラファエルさんや笑顔が素敵な同僚たち。
共に泣き笑い汗を流した熱い2年間でした。
エルサルバドルと日本の協力の糧が、これからも美しく繋がれることを期待しています。



朴 耕一（ぱく こういち）氏

2022年～2024年 体育隊員

サンサルバドルに派遣され、障がい者スポーツの振興に取り組むプロジェクト(PROADI)に従事。現在、米国で大学職員として、大学のグローバル化に貢献し、国際交流プログラムの企画運営に従事している。